

主 題：敵であるサタンの敗北 ④

聖書箇所：黙示録 12：13-14

ヨハネの黙示録 12章をお開きください。

この12章の中で、私たちは患難時代に現れる7人の登場人物を見て来ました。ひとりの女が出て来ます。イスラエルです。大きな赤い竜が出て来ます。サタンのことです。男の子が出て来ます。キリストのことです。そして前回、私たちは天から落とされたサタン、天におけるミカエルとサタンの闘いが記されているところを見てきました。

E. 「竜に迫害される女」 13-17節

1. 「竜」の迫害

きょう私たちは13節から竜に迫害される女のところを見て来ます。13節「自分が地上に投げ落とされたのを知ったのは、男の子を産んだ女を追いかけた。」と記されています。実は6節でこの出来事の概要が記されていましたが、この13節からその出来事がより詳細に記されていることにお気づきになると思います。6節には「女は荒野に逃げた。」、そして彼女のために「神によって備えられた場所がある」ということが記されていて、13節以降はもっと詳しくその出来事が説明されています。

13節「自分が地上に投げ落とされたのを知った」サタンが女、つまりイスラエルに対する迫害をなすと教えていますが、この「知る」ということばは「～であることに気づく」とか、「理解する」という意味を持っています。サタンが投げ落とされることに気づいたことによって、彼はイスラエルに対するより厳しい迫害を始めて行くわけです。「竜」ということばについての説明は既にして来ました。サタンの特性を象徴的に表しています。大変恐ろしい存在だということです。コミカルな存在では決してありません。大変な知恵と力を持った神の敵であり、私たち信仰者の敵です。このサタンがイスラエルに対して迫害をもたらすという話です。

既に我々は見て来ましたけれども、このことは患難時代の後半3年半に起こる出来事です。実はこの3年半については大変な時代が来るということイエスがマタイの福音書の中でお話になっています。マタイ24：21で「そのときには、世の初めから、今に至るまで、いまだかつてなかったような、またこれからもないような、ひどい苦難があるからです。」とされています。イエスが言われたように、大変な迫害がこの患難時代の後半に起こるのです。そのことは我々もう何度も見て来ました。特にこの13-14節を見る時に、その中であって神は彼らをしっかりと守って行かれることが記されています。確かにイスラエル、特にその中でも主イエス・キリストの救いに与っておられる人たちが大変な迫害を受けます。この理由は13節の中にも出て来ます。主イエス・キリストを信じたユダヤ人たちは大変な迫害を経験するわけです。

ところがそのような人々に対する神様の約束は、何があっても必ず神が守るというものです。これは彼らが殉教しないという話ではありません。神様はちゃんと彼らを守って行かれる、そのことをここでも約束されるわけです。なぜ神が守らるのに殉教するのかと。たしかにこの患難時代においてたくさんの信仰者がその信仰ゆえにいのちを落として行きます。それは神様が守っておられないと言うものではありません。神が守り、神のみこころがなされたのです。そのことは私たちの学びがそこに来た時にまた見て行きたいと思えます。

2. 「主の助け」 14節

さて、13節では、神の臨在から、第三の天から落とされたことに気づいた「竜」、サタンは大変な迫害をもたらすと。前回も見たように、このことによって彼の働きの場所は第一の天と第二の天に限定されるのです。そして大変な苦しみをもたらすのだと。14節は「しかし」という接続詞で始まっています。確かに大変な困難が、大変な苦しみが、人類がこれまでに経験したことがないような大変な迫害が起こるわけですが、そこに神の守りがあると。14節「女は大わしの翼を二つ与えられた。自分の場所である荒野に飛んで行って、そこで一時と二時と半時の間、蛇の前をのがれて養われるためであった。」とあります。翼が与えられたのは約束されたところに行くためであったということが記されています。ですからこの14節では神様の守りということを教えるわけです。神様が守ってくださるのは、このイスラエル、彼らだけではありません。神はあなたを守ってくださる。もっといえば神様はあなたを守り続けてくださっていると言うべきだと思います。

よく病院にお見舞いに行きますが、特に手術の時、その教会員の皆さんとあるみことばをお読みして祈る時を持ちます。聖書の中でも私の最も好きなみことばの一つですが、そこにはこう記されています。

「神はわれらの避け所、また力。苦しむとき、そこにある助け。それゆえ、われらは恐れぬ。たとい、地は変わ

り山々が海のまなかに移ろうとも。たとい、その水が立ち騒ぎ、あわだっても、その水かさが増して山々が揺れ動いても。」(詩篇46:2-5)、神様の守り、神の力、そのことを歌った詩篇です。あのマルティン・ルターもこの約束を信じ、勇敢にその当時の教会が聖書のみことばから逸脱したことを明らかにしてチャレンジを与えました。その彼を奮い立たせたのがこのみことばであったとも言われています。この詩篇46篇の中で7節と11節に同じフレーズが繰り返されています。「万軍の主はわれらとともにおられる。ヤコブの神はわれらのとりでである。」と。つまり神は必ずあなたを守ってくださるという話です。全能なる神様があなたを守り、これからも守り続けてくださると。この黙示録12章を見ても、主が言われることは、確かにサタンはありとあらゆる知恵を用いてイスラエルを、主を愛する者たちを攻撃するけれども、心配するな、私が必ず彼らを守るからと約束を与えておられるわけです。

1) 翼が与えられる

また、翼が与えられると記されていました。実はこれは旧約聖書の出エジプト記19:4から引用されていると言われます。そこにはこんなふうに記されています。「あなたがたは、わたしがエジプトにしたこと、また、あなたがたをわしの翼に載せ、わたしのもとに連れて来たことを見た。」と。もうイスラエルの民はエジプトを出ています。彼らは紅海を渡り、そしてシナイ半島を南下し、シナイ山にやって来たわけです。そこで神がモーセを通してこのイスラエルの民にお話になるわけです。つまり神である私があなたたちを常に守って来たことをあなたたちは見て来たろうと言われるわけです。

この「わし」について、ダラス神学校のジョン・ハナという教授はこんな説明をしています。「わしの子どもが飛ぶことを学ぶ時、母鳥はその子どもの下を羽をいっぱい広げて飛ぶのだ。なぜそうするかというと、その子どもが落ちる時にその羽根でその子を捕えるためだ」と。それと同じように神はあなたを支えると、神はあなたを守ると言われるわけです。「大わしの翼」、これは主のなさることを比喩的に説明しているということは明白です。なぜタカではなくて「大わし」なのかというと、実は「わし」というのが翼を広げた時に一番大きいのです。北日本にも冬になるとやってくる「大わし」というわしがいます。大体体長90センチから1メートルぐらいのわしですが、広げたら2メートルから2メートル50センチになる大変大きな羽を持っています。タカもほかの鳥もこんなに大きな羽を持っていません。ですから、それを用いて神様の守り、また神の力を教えるわけです。

(1) 主の守り

申命記32:11-12を見ると、そこにこの「翼」に関してこんな教えが記されています。「わしが巢のひなを呼びさまし、そのひなの上を舞いかけり、翼を広げてこれを取り、羽に載せて行くように。ただ主だけでこれを導き、主とともに外国の神は、いなかった。」と。主がイスラエルの民を守って来られたことを、このように母親のわしが生子を守ることをもって説明しています。

(2) 主の力

またこの羽が主の力を表すわけですが、皆さんご存じのイザヤ40:31に「主を待ち望む者は新しく力を得、鷲のように翼をかって上ることができる。走ってもたゆまず、歩いても疲れない。」とあります。神があなたの力であり、神があなたに力を下さるということをこのように「わし」という例えを用いて教えるわけです。

さてきょうのテキストを見ると、この女、イスラエルに「わしの翼を二つ与えられた。」とあります。飛ぶためには二つ要るからです。そして、彼らは「自分の場所である荒野に飛んで行っ」と記しています。そして「そこで一時と二時と半時の間」養われるという話が書かれています。

・「場所」:「自分の場所である荒野」

まずこの女が飛んで行くところが一体どこの場所なのかはよくわかりません。「自分の場所である荒野」と記されています。これまで見たように、恐らく死海の東、南東の方面を指していて、恐らくエドムやモアブ、アモンの地、そういうところに導かれるのだろうと。

・「期間」:「一時と二時と半時の間」

皆さん見ていただきたいのは、彼らがそこで養われるその期間です。どれぐらいの間彼らが養われるのか——。「一時と二時と半時の間」と不思議な書き方をしています。実はこれは初めて出て来た表現ではないのです。ダニエル書の中にこのように記されているところが二カ所出て来ます。ダニエル7:25に「聖徒たちは、ひと時とふた時と半時の間、彼の手にはゆだねられる。」と書いてあります。これは世の終わりにあって、にせキリストによって主を信じる者たちが迫害される期間の話です。またダニエル12:7にも「ひと時とふた時と半時である。聖なる民の勢力を打ち砕くことが終わったとき、これらすべてのことが成就する。」と書かれています。つまり、御使いガブリエルに「この支配が終了するのはいつですか」と質問したわけです。その時にガブリエルが言ったのは「ひと時とふた時と半時」、その後すべての支配が終了するのだと。この「一時と二時と半時」、これを足すと三時半になります。黙示録の中では42カ月ということばが11:2と13:5にあります。1260日という表現は黙示録11:3や12:6に出

て来ます。全部同じことを言っているのです。1260日＝42カ月＝3年半です。ですからこの「一時と二時と半時」、三時半というのはこの3年半のことを指しているわけです。この間大変な迫害があるけれども、神がちゃんと守ると。

ダビデも神様の守りを次のように言っています。詩篇57：1「神よ。私をあわれんでください。私をあわれんでください。私のたましいはあなたに身を避けていますから。まことに、滅びが過ぎ去るまで、私は御翼の陰に身を避けます。」と。大変な困難がやって来ようと、大変な苦しみがやって来ようと、私は主よ、あなたの御翼のもとに身を置きますと。ダビデは自分の子どもから命をねられるというような大変なことを経験しました。でもそんな中であって、ダビデがしたことは人間に助けを求めるのではない、神のところに助けを求めに行ったということです。日々の生活にあって確かにいろいろなことが起こって来ます。あなたはどこに助けを求めに行きます？あなたの話をいつも熱心に聞いてくれるあなたの友人のところなのか、またある人はひよっとしたらむしゃくしゃした思いを晴らすために気晴らしと言って何か楽しいことをして忘れようと思うかもしれない。もしそういう選択をされているのだったら、あなたに言わなければいけないことがあります。それは主イエス・キリストを知らない人たちと同じ解決方法だということです。世の中の人たちはそうやって今抱えている問題から逃避し、一時的な解決を求めようとします。信仰者の皆さん、我々クリスチャンはいつも神のところにに行けるといことです。神があなたをしっかりと守ってくださるし、神があなたを支えてくださるのです。その翼でもってあなたを守ってくださる。全能なる神様の御力をもってあなたを支え、あなたを守るという約束をいただいているながら、なぜ神以外のところに解決を見い出そうと助けを求めに行くのかです。一つだけ言わなければいけません。あなたがそれを繰り返している間はいつまでたっても神様の祝福をいただくことがないということです。その選択が間違っているから、約束された平安が心を満たし続けることがない。喜びが心を満たし続けることがない。神はそうしてあなたの取っている選択が間違っていることを明らかにし続けてくださっている。信仰者である我々はこの神のもとに助けを求めて出て行くことができるのです。そのように信仰の勇者たちが生きたのです。問題は私たち、あなたがどうかです。

2)「養われる」

さて、きょうのテキストを見ていただくと、この14節にもう一つ約束があるのを皆さんお気づきになるとと思います。「そこで一時と二時と半時の間、蛇の前をのがれて養われるためであった。」と。「養われる」ということばが出てきています。受け身です。だれかによって「養われる」のです。この動詞は「世話をする」とか「必要な糧を与える」といことです。つまりこのことばが意味していることは、この三時半の間イスラエルを神様がちゃんと世話して行かれる、彼らに必要な糧をすべて与え続けて行かれるという約束です。神が守るだけではなく、彼らを養うと言うのです。この約束は聖書の中に何度も出て来ます。例えば皆さんよくご存じの出来事として思い出されるのは、あの預言者ティシュベ人エリヤの話です。I列王記17章に出て来ます。この預言者エリヤはアハブ王様に対してこの二、三年は雨も露も降らないでしようかと告げるわけです。

(1) 鳥によって養う 4-6節

そしてその後エリヤを「ヨルダン川の東にあるケリテ川のほとりに」送り、そこで身を隠しなさいと言うわけです。17：3に出て来ます。4節「そして、その川の水を飲まなければならない。わたしは鳥に、そこであなたを養うように命じた。」と、「養う」ということばが出て来ました。6節を見ると、「幾羽かの鳥が、朝になると彼のところにパンと肉とを運んで来、また、夕方になるとパンと肉とを運んで来た。彼はその川から水を飲んだ。」とあります。こんな鳥がいたら町もきれいになるとは思います。今の鳥はその逆で食べ物を使い散らかしている感じがします。神はエリヤを「養う」と言われ、そのために使われたのが「鳥」です。

(2) やもめによって養う 8-16節

それだけではないのです。8節から見ると、エリヤはシドンのツアレファテというところに行きます。そしてそこに住みなさいと主が命じられるわけです。9節には「見よ。わたしは、そのひとりのやもめに命じて、あなたを養うようにしている。」とまた「養う」ということばが出て来ます。最初は「鳥」をお使いになり、今度は「やもめ」を使うと。10節「彼はツアレファテへ出て行った。その町の門に着くと、ちょうどそこに、たきぎを拾い集めているひとりのやもめがいた。そこで、彼は彼女に声をかけて言った。『水差しにほんの少しの水を持って来て、私に飲ませてください。』」と。皆さん、神の前に偶然など存在すると思います？いいえ、エリヤがこのツアレファテに行った時に、彼女がその場に出て来たのは偶然ではなかったのです。神の摂理、すべては神様が導いておられる。読んでみると、どうも彼女はエリヤを養うようにという命令を受けていないかのように見えます。というのは、彼女は喜び勇んでたきぎを集めに出て来たわけではありませんでした。彼女のことばを聞くとよくわかります。「水を持って来てください」と言うエリヤに対して、彼女は水を取りに行こうとします。その時に11節「一口のパンも持って来てくださ

い。」とエリヤが彼女に言っていることばが出て来ます。その時の彼女の答えを見てください。「あなたの神、主は生きておられます。私は焼いたパンを持っておりません。ただ、かめの中に一握りの粉と、つぼにほんの少しの油があるだけです。ご覧のとおり、二、三本のたきぎを集め、帰って行って、私と私の息子のためにそれを調理し、それを食べて、死のうとしているのです。」と、希望を持ってたきぎを集めに来たわけではありません。これが私たちにとっての最後の食事で、これを食べたら死ぬという失意の中にいたわけでした。食べ物、油が底をついていました。もう我々は長く生きて行けないと。その時にエリヤが13節でこう言います。「恐れてはいけません。行って、あなたが言ったようにしなさい。しかし、まず、私のためにそれで小さなパン菓子を作り、私のところに持って来なさい。それから後に、あなたとあなたの子どものために作りなさい。イスラエルの神、主が、こう仰せられるからです。『主が地の上に雨を降らせる日までは、そのかめの粉は尽きず、そのつぼの油はなくなる。』」と。皆さんこう言われたらどうします？さっきつぼの中を見て来ました。粉もほんの一握り、油ももうそれを焼くのにぎりぎりです。この見知らぬ人物がそれで私のためにパン菓子を焼きなさいと言うわけでした。その上で自分のためにと。この人何を言っているのだろう、私の言ったことを理解しなかったのだろうか。しかし、この女性はそんなふうには思っただけではありません。15節「彼女は行って、エリヤのことばのとおりにした。彼女と彼、および彼女の家族も、長い間それを食べた。エリヤを通して言われた主のことばのとおり、かめの粉は尽きず、つぼの油はなくならなかった。」と。主を信じ信頼する者を神は決して裏切らないということです。絶望の中に、失意の中にいたこの女性はその中で希望を見出すのです。その希望は神に見出したのです。神は生きておられる、神は必ず私たちの必要を満たしてくださいと。それが信仰者の希望です。こうして神はやもめをお使いになった。最初は鳥でした。次に大変ひもじいやもめでした。普通だったらこの町の最も裕福な人、神によってアレンジされていて、エリヤを自分の豪邸に招いて、好きな物を食べてくださいと言うような人を使うかもしれませんが、神はそんな方法を選ばれませんでした。大変貧しいこのやもめを用いた。

このみことばが我々に教えてくれるのは、エリヤも主に従ったと同時に彼女も主のことばに忠実であったということです。あなたが主に忠実に歩んで行かれるならば、神はあなたを用いて誰かの祝福としてくれます。あなたの祝福が周りの人々の祝福になります。彼女はここで大変なレッスンを学ぶのです。神の言われたことは必ずそのとおりになるということです。神がお使いになったこの二つ、鳥とやもめを見る時に、主は人間的には絶対に不可能と思える状況を用いてご自身の御力を示されたということです。皆さんに質問ですが、あなたのお信じになっておられる神様はこのエリヤが信じた神なのでしょうか？このやもめが信じた神なのでしょうか？もしそうだとしたら、私たちはこの神に対して正しい態度をもって接するべきです。この方は言われたことを必ず守られるお方です。「養う」と言ったら必ず養ってください。あなたはそのことを経験して来られた。問題は今あなたが置かれている状況で同じ信頼を持って、確信を持って主に信頼し続けておられるかどうかです。希望を見失っていませんか？主はこうしてご自身の御力を示された。そのために神はこの鳥を、人間では絶対考えつかない方法をもってこの神こそが生きて働いておられるまことの神であるということ、真実な神であるということ、を明らかにされたのです。

(3) 御使いによって養う 19 : 5 - 8

三つ目、I列王記19章で御使いを使ってエリヤを養って行かれます。19 : 5 - 8「彼がえにしだの木の下で横になって眠っていると、ひとりの御使いが彼にさわって、『起きて、食べなさい。』と言った。彼は見た。すると、彼の頭のところに、焼け石で焼いたパン菓子一つと、水のはいったつぼがあった。彼はそれを食べ、そして飲んで、また横になった。それから、主の使いがもう一度戻って来て、彼にさわって、『起きて、食べなさい。旅はまだ遠いから。』と言った。そこで、彼は起きて、食べ、そして飲み、この食べ物に力を得て、四十日四十夜、歩いて神の山ホレブに着いた。」とあります。神はエリヤを養うために御使いをお使いになった。

この出来事が起こる背景は17 - 18章の中に出て来ます。特に18章を見ると、エリヤとアハブ王様、そしてその妻であるイゼベルに仕える預言者たちがどちらの神が本当の神なのかを明らかにしようとしてカルメル山の上で戦いを挑んだことが記されています。天からの火をもって答える神、その方こそがまことの神であると。そして確かに主はエリヤの祈りにこたえられて、彼が水をかけていけにえも祭壇も水浸しになっている状態で主は天から火をもってそのすべてを焼き尽くされた。バアルもアシュラムも、彼らの預言者は一生懸命祈ったけれども、そこには答えがなかった。アシュラに仕える預言者400人、バアルに仕える預言者450人が殺されたのです。イゼベルは大変な怒りを持ちました。その後この19章の初めに出て来るように、もし明日のこの時間までエリヤが生きていたとしたら、神々が私を罰しますようにと。言えることは神々は彼女を罰しませんでした。まことの神が彼女を罰しました。でもこの明日のこの時間までエリヤを生かしておかないという声を聞いた時エリヤは逃げるのです。その時の話です。しかし、神はこの御使いを使ってエリヤを養われた。

神を知るため 申命記4 : 32 - 40

もう一度きょうのテキストに戻ると、この14節のところで迫害に遭っているイスラエルを神は「養う」と約束されました。この「養う」ということばは、受け身だと先ほど言いました。現在形になっています。神はちゃんと彼らを養い続けて行かれるという話です。先ほど私たちが見て来たエリヤのいろいろな出来事、なぜ神様はこういったことをなさったのか——。一つははっきりした答えがあります。それは神を知るためにです。

少し説明します。申命記4：32-40で主はモーセを通してイスラエルの民（このイスラエルの民というのはエジプトを出て来た民ではなく新しい世代です。エジプトを出て来たすべての人たちは彼らの不信仰ゆえにヨシュアとカレブを除いてみんな死に絶えました。）が約束の地に入ろうとすることに對して、神のメッセージを伝えます。「:32 さあ、あなたより前の過ぎ去った時代に尋ねてみるがよい。神が地上に人を造られた日からこのかた、天のこの果てからかの果てまでに、これほど偉大なことが起こったであろうか。このようなことが聞かれたであろうか。:33 あなたのように、火の中から語られる神の声を聞いて、なお生きていた民があっただろうか。:34 あるいは、あなたがたの神、主が、エジプトにおいてあなたの目の前で、あなたがたのためになされたように、試みと、しるしと、不思議と、戦いと、力強い御手と、伸べられた腕と、恐ろしい力とをもって、一つの国民を他の国民の中から取って、あえてご自身のものとされた神があっただろうか。:35 あなたにこのことが示されたのは、主だけが神であって、ほかには神はないことを、あなたが知るためであった。」と出て来ます。なぜイスラエルの人々がさまざまな奇跡を経験して来たのか——。それは、このイスラエルの神だけが本当の神であるということをおなたたちが確信を持つためであると言うわけです。そして36節「主はあなたを訓練するため、天から御声を聞かせ、地の上では、大きい火を見させた。その火の中からあなたは、みことばを聞いた。」と。「主はあなたを訓練するため」にさまざまなことをして来られたと言うのです。「訓練」というのは「教えるなす」とか、時には「警告を与える」という意味を持ったことばです。ということはあなたの毎日の生活で起こるさまざまなことは偶然ではなく、すべて神様があなたに与えてくださる「訓練」だと言うのです。あなたの神がまことの神であるということにあなたが確信を持つためにです。

申命記8：5では「あなたは、人がその子を訓練するように、あなたの神、主があなたを訓練されることを、知らなければならない。」とあります。神はあなたや私を訓練されるのです。日々の生活を通してみことばを適用しなければならぬ境遇に置かれることによって、我々は学んで来たみことばを適用し、確かに主が言われたとおりに。そのことを通してそのみことばが私たちの確信へと変わって行くのです。だから私たちはどんな時でも神様のみことばに立つことです。どんな時でもこの神に信頼を置き続けることです。あなたが主を信頼するために、あなたが主に対して強い確信を持つために、あなたがこの主こそがまことの神であるということを確認するために、主はあなたに訓練を与えていると。あなたを愛する神があなたのために、特別にその場所を、その時間を与え、そしてあなたを鍛えてくださっていると。こうして信仰者たちは生きて来たのです。彼らは彼らなりにいろいろな問題や苦しみ、悩みがあったでしょう。でもその中であって彼らは主を見上げたのです。主に信頼を置いたのです。主の言われたことは必ずそうなるという信頼を持ったのです。あのやもめもそうでした。その時に神のみわざを見るのです。そしてその神の約束がその人にとっての確信になります。そんなふうに信仰生活を生きるのです。神はこうして主の約束が真実であり、また約束を与えられた方が真実であることを証明して来られた。

◎ 患難時代、神は異邦人信仰者たちによってイスラエルを養われる。

きょう我々が見た14節のところで、3年半の間迫害されているイスラエルを神が養われるとありました。エリヤに対して神がどんなふうに養って来たのかを見て来ました。では、このイスラエルを神がどんなふうに養って行くのか。実は聖書は我々にちゃんとそのことを教えてくれているのです。恐らく皆さんはこの箇所を何度もお読みになったと思います。でもひょっとしたら何の意味かよくわからないという結論で終わったかもしれない。どこのどんな話かという、マタイ25：35-36「わたしが空腹であったとき、わたしに食べる物を与え、わたしが渴いていたとき、わたしに飲ませ、わたしが旅人であったとき、わたしに宿を貸し、わたしが裸のとき、わたしに着る物を与え、わたしが病気をしたとき、わたしを見舞い、わたしが牢にいたとき、わたしをたずねてくれたからです。」という話です。あのオリブ山においてこの大切なレッスンを主は弟子たちにお与えになった。25：31を見ると、「人の子が、その栄光を帯びて、すべての御使いたちを伴って来るとき、人の子はその栄光の位に着きます。」とあります。主イエス・キリストが帰って来る話ですが、これは空中再臨、空中携拳の話ではありません。主イエス・キリストが地上に帰って来る地上再臨の話です。「栄光の位に」お着きになるのです。なぜかという、主は千年の王国を築かれるからです。32-33節に「そして、すべての国々の民が、その御前に集められます。彼は、羊飼いが羊と山羊とを分けるように、彼らをより分け、羊を自分の右に、山羊を左に置きます。」、そしてさばきが行われるのです。このさばきは黙示録の中に出て来る「大きな白い御座のさばき」、つまりイエス・キリストを

拒み続けた者たちが神の前でその罪をさばかれるさばきとは違います。主イエス・キリストを信じる者たちは皆キリストのさばきの座について神様から褒美をいただく、そのさばきでもないのです。ではここに書かれているさばきとは何かというと、これは「諸国民のさばき」というさばきです。「すべての国々の民が」御前に集められてさばきを受けると言うのです。主イエス・キリストが地上に帰って来た時にこのさばきが起こります。

こうして「羊」と「山羊」と二つに分けられます。「羊」というのはこの救いに与っている者たちです。ですから46節「こうして、この人たちは永遠の刑罰にはいり」、これは「山羊」です。「正しい人たちは永遠のいのちにはいる」、これは「羊」なのです。では一体何が違うのかというと、先ほどもお読みしたように「羊」は35節「わたしが空腹であったとき、わたしに食べる物を与え、わたしが渴いていたとき、わたしに飲ませ、わたしが旅人であったとき、わたしに宿を貸し、わたしが裸のとき、わたしに着る物を与え、わたしが病気をしたとき、わたしを見舞い、わたしが牢にいたとき、わたしをたずねてくれたからです。」。すると彼らは37節にこう言うのです。「その正しい人たちは、答えて言います。『主よ。いつ、私たちは、あなたが空腹なのを見て、食べる物を差し上げ、渴いておられるのを見て、飲ませてあげましたか。38 いつ、あなたが旅をしておられるときに、泊まらせてあげ、裸なのを見て、着る物を差し上げましたか。39 また、いつ、私たちは、あなたのご病気やあなたが牢におられるのを見て、おたずねしましたか。』」と。すると王は答えてこう言います。「まことに、あなたがたに告げます。あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです。』」。「山羊」も主人からこう言われます。41節「のろわれた者ども。わたしから離れて、悪魔とその使いたちのために用意された永遠の火にはいれ。25:42 おまえたちは、わたしが空腹であったとき、食べる物をくれず、渴いていたときにも飲ませず、25:43 わたしが旅人であったときにも泊まらず、裸であったときにも着る物をくれず、病気のときや牢にいたときにもたずねてくれなかった」。彼らも同じように質問するのです。「主よ。いつ、私たちは、あなたが空腹であり、渴き、旅をし、裸であり、病気をし、牢におられるのを見て、お世話をしなかったのでしょうか。」。すると王が答えます。「まことに、おまえたちに告げます。おまえたちが、この最も小さい者たちのひとりにしなかったのは、わたしにできなかったのです。」。ここで言われている話は、患難時代の終わりに迫害されているクリスチャンたち、イスラエルを援助した者たちとそうでない人たちです。

我々が見て来たように、イスラエルは大変な苦しみを経験します。黙示録13章には「666」という数字をつけないと物を売ったり買ったりすることができなくなるとあります。それは獣のしるしですから、信仰者はそのマークをつけません。そうすると大変苦しい生活が待っているわけです。この「羊」はその人々に対して食べ物を与えたり、泊まる場所を与えたり、彼らの世話をしたという話です。「山羊」はそれをしなかったと言うのです。

私たちが間違ってしまうのは、こういうよい行ないをしたから救いに与り、よい行ないをしなかったから救いに与らないのか——。そうではないのです。信仰を持っている、苦しんでいる、このイスラエルに対してこのようにしたのは、彼ら自身が信仰を持っていたからだと教えるのです。彼らの信仰が本物であるというのはこの実によって明らかにされたのです。この困っている人たちを助けなかった人たちはその行ないによって彼らが救われていなかったことを明らかにしている。それがこのマタイ25章で言われているイエス様の教えなのです。そしてこのことが実際に起こるのが、今我々が見ている黙示録の患難時代の最後の3年半です。

この件に関してルイス・シェイファーというダラス神学校の創設者であり、初代校長である方がこんなふうに説明を加えています。「羊は行ないを根拠にして救われているのではないが、彼らの行ないは彼らが救われていることを確実に示している。それは人がその結ぶ実によって知られるという原則の適用である」と。本当に救いに与っている人たちは生まれ変わるのです。その人たちは実を結ぶのです。主に喜ばれることをして行こうとするのです。この迫害されているイスラエルを、信仰者をかくまう、助けるということは大変なリスクが伴うのです。しかしその中であって、この人たちはキリストの愛がそのようにさせるのです。自分たちがどうなっても、この愛する兄弟たちを助けて行こう、その行為が彼らが本当の救いに与っていたことを示しています。なぜなら救いというものは行ないによって得るのではなくて主イエス・キリストを信じる信仰によってのみ与えられるものです。しかし救いをいただいた者たちは、救われたことがその実によって明らかにされることがここに記されているのです。こうして神はこの迫害されているイスラエルを養って行くのです。

ばらばらであった聖書のみことばがつながって来ませんか？ イエス様はあの十字架に架かる前にちゃんとこのお話をされていたのです。そして今我々がこのヨハネの黙示録を見る時に、神様が言われているこの人々を「養う」というのは、あの25章の中でイエス様が教えておられたことであると。神の計画はなされます。神が約束されたことは必ずなされます。そんな偉大な神様を私たちは信じたのです。いやそんな偉大な神様によって私たちは救われたのです。もっとこの方を誇るべきであり、もっとこの方を

人々に伝えて行くことが必要だと思いませんか？偉大な神です、大変な神です。言われたことを必ず実践なさる神、生きて働いておられる神、この方が私たちの神です。どうぞ神のすばらしさを証する者としてこの一週間も生きてください。

《考えましょう》

1. サタンの迫害を受ける「イスラエル」に対する神の約束を記してください。
2. この「養う」という約束が信仰者であるあなたにも与えられています。この約束をいただいたあなたがどのように日々を過ごすことを主が望んでおられると思われませんか。
3. 「主の約束」を堅く信じるため、また信じ続けるためにはどうすればよいと思いますか。また、主の約束を堅く信じ続けることができないのはどうしてでしょう。
4. きょうのみことばからあなたが教えられたことを信仰の友と分かち合い、その実践のために互いに祈り合ってください。